

\*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



—チェルノブイリに思いをよせて—

# ポレーシェ

<連続講座>

## チェルノブイリ/フクシマ講座 が始まります!!

あの「ウクライナ講座」が、新たに福島をテーマに加えて復活しました。ウクライナも福島も、大変な原発災害に見舞われ、被災地として注目され続けてきました。

しかし、「被災地」としての一面だけでなく、自然や文化・歴史、そこに住む人々の暮らしなどに目を向け身近に感じてこそ、支援につながるのではないかという思いから、この連続講座を企画しました。

第1回は、「測定センター・とどけ鳥」のある南相馬市からゲストをお招きして、住民交流会を行います。

ゲストは、とどけ鳥のボランティアスタッフ、森田さんと小林さん。そして、南相馬で復興支援をしている「NPO 法人フロンティア南相馬」のスタッフの方です。最新の南相馬の様子、ボランティアで感じたこと、仮設住宅での暮らしなど、様々な立場の方の想いをお聞きしたいと思います。

アットホームな雰囲気交流会です。どうぞお気軽にご参加ください。お問い合わせは事務局まで。



<1千年以上の歴史がある「相馬野馬追（そうまのまおい）」が開催された。(7/28~30)>

### チェルノブイリ/フクシマ講座

#### 第1回「南相馬での日々」～福島で生きるということ～

日 時：10月27日（土）16時半～18時半

場 所：ウィルあいち/3F「会議室4」 東区上笠杉町1番地  
(地下鉄名城線「市役所」駅 ②番出口より東へ徒歩10分)

参加費：500円（中学生以下無料）カンパ大歓迎！

共 催：(特活) 名古屋NGOセンター

※三井物産環境基金復興助成の支援を受けています。

★10月27日(土)・28日(日)は、ワールドコラボフェスタ2012が開かれます。

久屋大通公園「もちの木広場」で、チェル救とフロンティア南相馬が共同でブース出展をします。

10時～16時まで開催していますので、こちらにもぜひお越しください！  
(兼松真梨子)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

### NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀 行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号150)

□ 座 番 号：普通 6949211

□ 座 名 義：特定非常利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵 便 振 替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org



## <南相馬便り>

(神谷 俊尚)

「放射能測定センター・南相馬」(とどけ鳥)は、一時ほどの混雑さはなくなりましたが、毎日ほぼフル稼働が続き、5月より現在まで約 1,400 検体近い測定を行っています。(その大まかな報告は p3 をご覧ください。)最近、川で捕ったうなぎ 13 検体を測定したところ、南相馬市放射線量率マップ(2012年4月版)と合致し、高い線量の場所で採取したうなぎからは 5,450Bq/kg、低い場所では 310Bq/kg でした。多くの検体を測定するにつれ、想像ではなく実態として汚染の状況が把握できる体制が、揃いつつあります。多くの市民が、不安を抱えたままでの生活を余儀なくされていますが、少しで

<9/25、新調したピブスが届きました。10月、11月の空間線量測定の時から着用する予定です。後姿が良いでしょう？(とどけ鳥にて)>

も不安を解消した食生活を送れるように、とどけ鳥も色々発信して行きたいと考えています。

さて、8月上旬福島県は、「今年度の小学生の生徒数が、約 5,100 名(内、福島市 1,850 名、郡山市 1,620 名)減少した」と発表しました。そして、県人口も 200 万人を割り込みました。県外への避難流出が続いています。南相馬市の現状を見てみると、震災前人口が 71,000 名、現在の住民登録数は約 65,000 名で、約 6,000 名が震災後転出。60 歳以上の人口割合は、震災前 24%、現在 40%です。幼稚園・保育園在籍園児で見ると、震災前の合計が 2,340 名、2012年4月現在は 769 名に減少し、わずか 32.8%の在籍率です。小学校で 50%弱、中学校 60%、高校 70%の在籍率とされています。

また、南相馬市が 7 月に行った市民意識調査でも、震災後家族が別々に暮らしている…35%、市への帰還意向に対しては、「戻らない…4%」「戻りたくない…16%」と回答しています。日常生活での不安や心配では、「放射線による人体への影響に不安」が群を抜いており、「原子力賠償への不安」「体調面や健康面に不安(放射能以外)」「医療・福祉サービスに不安」と続いています。改善に向けて必要な施策では、「放射線の詳細な情報や知識の周知」が群を抜いており、「通院・入院など医療サービスの充実」「安心・安全な幼児の子育て環境の充実」となっています。

これらの事から見えてくるのは、「若くて小さな子どもを抱えている家族が、多く避難されている」こと、そして「その家族が、仕事の関係上、別れて生活せざるを得ない環境に追いやられている」ことです。市民が一番心配をしている「放射線による人体への影響」を取り除くためとして、国や市は除染、除染と叫び続けています。小高区は環境省が、原町区・鹿島区は市が行う事となっています。小高区は、4月中旬に「警戒区域」から「避難指示解除準備区域」になり、昼間の立ち入りが自由になりました。地震による崩落家屋や津波による瓦礫等は、かなり片づけられましたが、除染に関しては、現在、山沿いの家屋から調査が始まり、1軒1軒の同意を取る作業が始まった状況です。しかし、ここでも問題が発生しています。老朽化した家屋や地震等で傷みのある家屋等に対して、「高圧洗浄機が使えないので除染ができない」ことも含めて、同意を取る作業が進行しているのです。

原町区・鹿島区においては、ガレキの仮置場が決まらず、「仮仮置場」が決まった行政区内の除染活動のみを、行っているのが現状です。全体の数%しか進捗していません。市民が安心して戻り、子育てができる環境には、まだまだほど遠いと言わざるを得ません。

チェル救は、昨年以来3回にわたり、市内の放射線量測定とマップ発表を行ってきました。

第4回目の測定を、10/20~21と11/3~4の4日間に分けて市内全域で実施します。前3回の測定で解ったことは、放射能が「物理的半減期の約3倍の速さで低くなっている」ことです。原因としては、①雨等で汚染土壌が洗われ、排水溝・川などに流失、②雨で地中に拡散し、表土が遮蔽帯になっている…などが考えられます。今回、小高区内は2回目なので、前回との比較が待たれます。測定後12月初めには、市民の皆様にはマップの発表を行いたいと考えています。

<放射能測定センター・南相馬(とどけ鳥) 活動報告(第一回)>  
**検体の種類別測定件数(平成 24 年 5 月～9 月上旬)**

(単位；件)

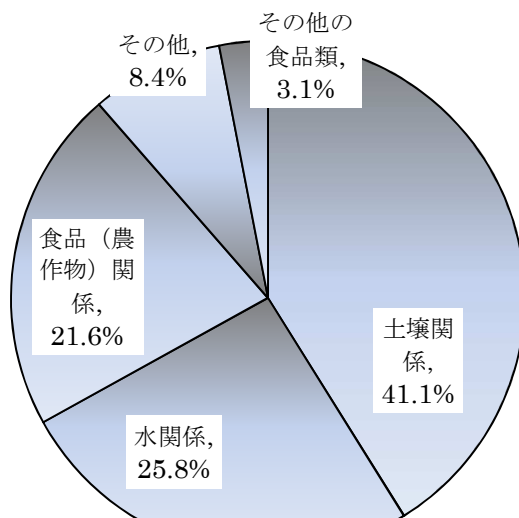
種類	件数	種類	件数	種類	件数	種類	件数	種類	件数
土壌関係	565	水関係	355	食品(農作物)関係	297	その他の食品類	42	その他	115
水田・畑の土壌	365	井戸水	194	葉物・根菜類	155	魚介類	23	菜の花類	19
その他の土壌	190	水道水	65	果実類	49	加工食品類	14	ひまわり類	9
アスファルト等	10	河川水	68	米・穀物類	51	肉類等	5	牧草類	2
		湧水	11	ハーブ類	17			雑草類	40
		溜り水等	17	山菜類	25			その他	45

依頼総件数 1,374

皆様のご支援により、当測定センターは開所以来、ほぼフル稼働。毎日、忙しく充実した日々を送っています。今後、このポレーシェ誌上でも、定期的に測定結果のまとめを報告していきます。今回はその第1回目です。開所から今までの測定件数は、4か月半で1,374件あり、月平均305件、開所日当たり平均約18件/日となっています。測定機器は、二台体制で対応していますが、各試験体に対して原則30分間測定を行っており、一日6時間(10時～16時)の開所時間では、日に20件程度が限界です。従って「一日当たり18件」の測定実績は、再測定や長時間測定を要する検体もある事から、ほぼフル稼働の状態で経過していることとなります。

種類別依頼件数は、土壌関係が565件(41.1%)、水関係が355件(25.8%)、食品(農作物)関係297件(21.6%)

で、全体の88.5%を占めています(グラフ参照)。地元の農業関係者からのまとまった依頼がある事から、田や畑の土壌や水関係の依頼件数が多めとなっていますが、土壌汚染・水質汚染、それに伴う農作物への放射能の影響などについて、市民の方々の心配が数字に表れていると思います。



放射線量測定の種類別件数の割合 (2012年5月～9月上旬)

今後も、計測(真の情報)を通じて、市民の方々に安心感を与えるとともに、必要な場合には的確なアドバイスや警告ができるよう、活動を継続していきたいと思っています。

(とどけ鳥ボランティアスタッフ)

← 稲の測定は、実と茎と根と土に分けて測定します。稲の根っこの間には、土がいっぱいまとわりついています。そのままでは、土を測ってしまうことになるので、ていねいに土を洗い落とします。きれいに洗って乾燥させてから、測定するのです。

## 2012年秋、第4期「放射線量測定隊」南相馬に行きます！

(池田 光司)

第4期南相馬「放射線量測定隊」を編成、南相馬市を訪れて放射線量率マップ作成のための放射線量測定を行います。過去3期(第1次～第7次)の測定結果は、山側が高く海側に向かって低くなる傾向や、物理的な半減期よりも早く低くなる傾向など、毎回貴重なデータが得られています。

(詳しい結果は、ポレーシェ124号・126号・129号をご覧ください。)

また、前は20km圏内の小高区への立入りが可能となり、事故から1年後に、はじめて同地区の汚染の実態が明らかになりました。今回は、小高区の測定に加え、今までは立入ることができなかった海岸部の測定も行う予定です。立入りができない一部山間部を除き、南相馬市のほぼ全域を測定することになります。

この測定のボランティアの魅力のひとつは、地元のボランティアの方とペアを組んで測定を行えることです。思わぬ形で現地の方との交流が生まれることもあります。また、作成したマップを街中で見かけたときは、測定をやってよかったなと思える瞬間です。

今回の測定でも、参加される一人ひとりに、さまざまなドラマが待っていることと思います。

### <測定隊募集概要>

参加費：2万円(現地集合の方は1万円) 交通費・宿泊費・夕食込み。

申込み・問合せ：メール ⇒ yymita@festa@ocn.ne.jp ファックス ⇒ 052-702-3135

担当：チェルノブイリ救援・中部 理事長 神谷 俊尚(かみたに としひさ)

※事務所では受け付けておりませんのでご注意ください。

### <武藤類子さんの講演会に参加して>

(神野 美知江)

9月25日に名古屋市YWCAで開催された、武藤類子さんの講演会に参加しました。皆さん、ご存知のとおり、武藤さんは今、「福島原発訴訟団」の団長として、日本全国の人々に呼びかけています。

第二次の告訴状提出が、11月中旬に予定されています。「福島のみならず、全国の人びとが被害者です。ともに手を携えて、告訴・告発に立ち上がりましょう!」と呼びかけています。

「いままで無責任だった大人」から決別して、「未来を守る大人になりたい」と思います。

以下に、9月25日の講演会資料より抜粋して紹介します。



<右から2人目が武藤さん>

### 「原発事故を引き起こした人たちへ」(武藤 類子)

今日、私たち1,324人の福島県民は、福島地方検察庁に「福島原発事故の責任を問う」告訴を行いました。

事故により、日常を奪われ、人権を踏みにじられた者たちが力をひとつに合わせ、怒りの声を上げました。

告訴へと一歩踏み出すことはとても勇気のいることでした。人を罪に問うことは、私たち自身の生き方を問うことでもありました。しかし、この意味は深いと思うのです。

- この国に生きるひとりひとりが大切にされず、だれかの犠牲を強いる社会を問うこと。
- 事故により分断され、引き裂かれた私たちが再びつながり、そして輪をひろげること。
- 傷つき、絶望の中にある被害者が、力と尊厳を取り戻すこと。

それが、子どもたち、若い人々への責任を果たすことだと思うのです。声を出せない人々や生き物たちとともにありながら、世界を変えるのは私たちひとりひとり。決してバラバラにされず、つながりあうことを力とし、怯むことなくこの事故の責任を問いつけていきます。

毎日毎日、否応なく迫られる決断。逃げる、逃げない。食べる、食べない。子どもにマスクをさせる、させない。洗濯物を外に干す、干さない。畑を耕す、耕さない。なにかに物申す、黙る。

## ウクライナの菜の花プロジェクトが新たな段階に

5 年前に蒔いた種が大きく育つ

8月30日、ウクライナから朗報が入った。これまでナロジチで行ってきた「ナタネプロジェクトの成果を生かし、ジトーミル州政府がナタネの大規模栽培を行う」というニュースである。2月訪問時に州政府関係者と話し合い、そうした方向で検討する、ということだったが、資金難で具体的な計画はまだ先になりそうだった。しかし、この8月に計画が州議会に提案され、補正予算が確保されたのである。当面は250ヘクタールで行う。過去5年間、さまざまな困難と闘いながら完成させた、ナタネ栽培とバイオエネルギー生産を連動させて、放射能汚染地域ナロジチの復興を目指したプロジェクトは、今大きく花開こうとしている。

### ナロジチ再生菜の花PJとは

連載83でも書いたが、菜の花PJの5年計画は、この3月で一応の完成を見た。放射能汚染地域のナロジチ地区で、放射性セシウムを良く吸収するナタネを栽培し、汚染土壌からゆっくりセシウムを除去しながら、ナタネ油でバイオディーゼル燃料を作り、汚染した油粕やバイオマスをもタン発酵させてバイオガスを作る、という計画である。放射能は、バイオガス装置の廃液に出る。これをゼオライトで吸着し、低レベル廃棄物として処分する。

5年間のナタネ栽培で、新たな事実が分かった。それは、「ナタネの連作障害を避けるために栽培した、裏作の小麦やライ麦などは、極めて汚染が少なく、食用や家畜飼料として利用可能だ」という発見である。

すでに何回も書いたが、ナロジチ地区は、年間5mm Svを超す被曝の危険性があり、強制移住対象地域になった。3万人いた住民のうち、2万人が非汚染地域に強制移住した段階で、ソ連が崩壊しウクライナは独立したが、経済が破綻し国の資金で移住できなくなり、1万人が取り残された。この人々を、私たちはこれまで支援してきた。ナロジチ地区中央病院の困難な状態を知り、伊那の原富男さんが現地に向かい、給水給湯設備と暖房設備を修理、また救急車の提供や、年間医薬品の半額を支援し続けてきた。

病院に行けば治療はできる。しかし、家に帰ればまた内部被曝で病気になる。このジレンマの解決のため考えたのが、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」である。ヒントになったのは、ウクライナで発表された小さな論文である。ナロジチのポドソル土壌で様々な作物を栽培し、その汚染レベルを調べた結果、ナタネの仲間が極めて強く汚染する、という内容であった。

20年以上時間が経ち、雨で地中深く浸透している放射性セシウムを除去したら、汚染されていない作物を作ることができるかもしれない、という発想である。

1年間かけて調査すると、こうした汚染土壌を浄化する「バイオレメデーション」という学問分野があることが分かった。「ナタネやアマランサスで、効率よく土壌からセシウムを除去できる」と、多くの論文は書いていた。一方、伊那にはバイオディーゼル燃料やバイオガスを実際に実用化し、経験を積んだ仲間たちがいた。この経験を生かし、「汚染したナロジチの

土壌を浄化し、内部被曝を減らそう」というのが、このプロジェクトである。

期待は大きかった。幸い現地の国立ジトーミル農業生態学大学が、全面的に協力してくれることになった。こうしてナロジチ菜の花PJは2007年に始まり、今年の3月で当初の計画は終わった。結論から言えば、ナタネ栽培で土壌を効率よく浄化するのは無理だと分かった。世界の多くの論文の主張は実験室でのもので、現実の汚染土壌での結果とは違っていた。

期待は外れたかにもみえた。しかし、汚染土壌でのプロジェクトであるが故の新たな発見によって、希望は見えた。ナタネ栽培は連作障害のため、同じ場所でナタネは栽培できない。裏作作物を3年間栽培し、またナタネを植える。こうした輪作を行い分析すると、ナタネは汚染するが、裏作の小麦やライ麦などはほとんど汚染しないか、きわめて汚染レベルが低く、食用や家畜飼料にできることが分かった。

これは大きな発見だった。大学や研究所の一回限りのポット試験では、分からなかったのだ。こうした成果をジトーミル州政府やナロジチ行政に報告し、これまで20年以上放棄されてきた広大な荒地での、新たな農業復興の可能性を提案した。

8月の州議会での決議は、この提案を受けての決断である。汚染の低い裏作作物を市場に出し、その収入で農家は生活できる。ナタネ油はバイオディーゼル燃料にして、トラクターやコンバインの燃料にし、エネルギーを自給する。汚染した油粕やバイオマスはメタン発酵させて、バイオガスにし燃料とする。バイオガス装置の廃液に出る放射能をゼオライトで吸着し、小さくまとめて低レベル廃棄物として処分する。ナロジチには、汚染した畑が1万haあるが、まずは250haから始める。

### 福島復興に向けて

ナロジチでの成果を生かし、汚染した福島の土壌でも汚染しない作物を作ろう。バイオエネルギーを原発に代わるエネルギー源とし、エネルギーの地産地消を目指そう。これが私たちの願いである。今、日本は大きな転換点に立っている。経済優先の価値観から、真の持続可能な社会とは何かを改めて考え直し、日本を変えよう。その芽は育ちつつある。(河田)

## 速報 !! 9月訪問団(現地からの報告)

州予算決定 !! 来春から、ナロジチの畑 500haで、  
菜の花とエネルギー作物を栽培 (原 富男)

9月16日から30日まで、河田・戸村・原の3名でウクライナを訪問することになり、現在ウクライナのホテルでこの原稿を書いています。今回の目的は、5年間の「菜の花プロジェクト」を終えるに当たり、この実験を振り返り、今後の方向を探ることです。

9月18日、実験の担当者である農大のディードゥフ氏と農業大学で話し合い、菜の花プロジェクトの成果を確認しました。

「放射能吸着装置」による吸着実験については、90%の吸着率は得られているものの、吸着時間が長続きしないという問題が残り、希釈率・カリウム濃度・残渣の混入などの点で、改善を図っていくことになりました。

バイオガス装置(BG)を視察した結果、担当者はバイオガス装置の扱いに熟知してきており、心配していた発酵槽の蓋の水封も行われていて、管理建物(貨車)・ミルク検査室とも、問題なくガスは発生していました。今後できることならば、エンジン発電機、または燃料電池による発電にもチャレンジしたいと思います。バイオディーゼル燃料(BDF)製造装置は問題なく保管され、土地管理ステーションには、今年獲れたナタネや油粕の袋が積み上げられていました。各プラントの所有権については、本日、関係者との話し合いをします。BGは現地農業企業体(カヴェツキー農場)、BDFは農業大学または地区行政に、移管されることとなります。

また、菜の花プロジェクトの実験結果についての話し合いを、現地ナロジチ町で行いました。地区行政やナタネプロジェクト関係者が集まり、成果を確認しました。我々のナタネプロジェクトが引き金となり、来年度から「ナタネを含むエネルギー作物を規模拡大して栽培する」べく、州予算が決定されました。また、エネルギー作物の栽培を推進する、内閣令も出されています。これにより、今後の栽培面積は500haとなり、ナタネとエネルギー作物ミスカンサス(荻：葦に似た4m程に伸びるススキ科の植物、ペレット燃料)が、栽培される予定です。場所は、我々の実験畑に隣接する広大な畑です。ナタネ栽培が規模拡大する中で、自家菜園(ダーチャ)の除染も必要ではないかと考え、その可能性を探るべく、ナロジチ町に隣接するセレッツ村を訪問し、村議会議長に事情を伺いました。人口608名のこの地域では、牛乳から200Bq/kgの放射能が検出されており、今後、自家菜園での放射能抑制などのアドバイスが、必要と思われます。

今回は、事故の後、汚染地ナロジチから逃れ、ブルシロフ地区に移住した移住者の村「ブルシロフ地区」の訪問も行いました。これまでチェルノブイリ地区への支援も行ってきました。今回、ブルシロフ病院が新装されたこともあり、病院・診療所を訪問したのですが、国のチェルノブイリ関係予算で新築された4階建ての病院は、清潔で西側の病院に引けを取らない内装でした。ただし、医療器具類は、超音波診断装置・内視鏡などが10年以上使われた古いものであり、課題は多いと言えます。また、これまで医薬品を主に提供してきた障害者2団体とも話し合い、状況をお聞きしました。いずれも、長い年月の中で置き去られ、無視され、補償が低下する状況にありますが、新たに福島を抱えた我々に何ができるのか、暫く検討する必要があります。

(ラスキのホテルにて 9/26 朝)

＜続報＞ 地区行政にて、ナタネ栽培規模拡大プロジェクトに関する、関係者間の話し合いが行われました。地区行政からは、副行政長ナザルチュク氏(行政長トロヒーメンコ氏は、体調不良とのことで欠席)、地区議会副議長プロコペンコ氏、ジトール農大からは副学長とディードゥフ氏、ホステージ基金から



＜菜の花畑とエネルギー作物畑の  
規模拡大予定地 なんと500ha!?!＞



＜新築されたブルシロフ地区病院＞

キリチャンスキー氏とガリーナさん、そしてチュマク氏。チェル救は、河田・原・竹内・戸村が参加しました。ジトーミル州議会のナタネ栽培規模拡大の予算をもとに、ナロジチ地区でいかに計画を実行していくかについて（関係者の議論で、一部通訳が追いつかないほど活発に）、意見交換が行われました。

第2ゾーンに、栽培用の畑500haの土地はある、農大が予算の執行に当たる前提で、実際のナタネ栽培、加工などの作業をどこが行うかが、議論の焦点でした。内閣令「エネルギー作物の栽培とバイオエネルギー燃料の生産を進める」が、国から出されたことでもあり、農大は、土地管理ステーション（ネステルチュク氏）をベースにして、新しく「エネルギー作物研究センター」を作り、ナタネ他ミスカンサスなどを栽培することを主張しています。チェル救は、実際の栽培には土地管理ステーションだけではなく、地区にあるいくつかの農業企業体に委託して競わせ、意欲を持たせるようにしてはどうかと提案しました。地区行政は、当初聞いていたカベツキー農場にこだわるようではありませんでした。このように活発に議論し、とにかく農大ディードゥフ氏たちが、10月23日迄に具体的なプロジェクトのロードマップを作成して、日本側（竹内さん）も参加し、地区側と再度話し合うことが約束されました。州議会予算が基礎となりますが、ウクライナ内閣・非常事態省・経済省にも、更なる資金を得るよう働きかけること（日本からの助成金も期待されていますが）、など話し合われました。

その後、規模拡大の予定地を視察、これまでの実験畑から程近いところで、見渡す限りの土地が予定されています（P6 右上の写真）。

明日は、キエフに移動して日本大使館を訪問し、説明かたがた協力を要請します。また明後日は、農大創立90周年の式典に招待されており、戸村さんがウクライナ語でスピーチをします。（下記参照）

こちらでのスケジュールは残り2日となりました。この間の気候は、外套が必要な程寒い日が続いています。私たちがウクライナを離れる頃には、若干気温が上がるとの予報です。

（ラスキのホテルにて 9/26 夜）



4

ジトーミル農業生態学大学の創立90周年のお祝いを申し上げます。

大学の学長、副学長、学部の教授の方々、関係者の皆さんが、大学の長い歴史の中で多大な研究の業績を積み重ねられ、多くの優秀な学生を輩出されてきたことに、大きな尊敬の念を抱きます。また、この晴れの日、私たちチェルノブイリ救援・中部のメンバーが列席させていただけることを、光栄に思います。

振り返れば、農大の皆さんとはすでに5年以上、強い信頼関係と友情を築いております。

チェルノブイリ被災地の再生復興を願った「菜の花プロジェクト」の共同研究が、ミコライ・ディードゥフ准教授をはじめ、大学院生・学部生の皆さんの地道な実験・研究によって、放射能被災地において大きな成果を上げていることは、皆さんご承知のことと思います。私の専門はNGOの国際関係であり、科学の専門ではありませんが、チェルノブイリ救援・中部メンバーの科学者・河田昌東、バイオエネルギーの専門家・原富男などが、ディードゥフ氏たちとともに研究し、成し遂げた成果は、世界で初めてのものといえます。

まだ皆さんの記憶にも新しいと思いますが、2012年3月11日の日本の大震災と、それに伴って起こった福島原発事故は、ウクライナと日本の関係をさらに近づけました。大変残念なことに、日本は、26年前のチェルノブイリ事故から、正しく教訓を得ることをしませんでした。そして、広島・長崎に続く多くの放射能被災者を、再び生み出してしまいました。今日本では、多くの国民の脱原発を願う声によって、政府も2030年までに原発を止める決定をしました。

現在、私たちチェルノブイリ救援・中部は、ジトーミルの被災者の支援活動と同時に、日本においてフクシマの被災者の支援を行っています。ジトーミルの皆さんの辛い経験は、フクシマの将来の姿かもしれません。しかし、私たちには希望があります。それは、「菜の花プロジェクト」から得られた研究成果と皆さんの貴重な経験、それに温かい友情です。

ジトーミルの皆さんからは、多くの尊い義捐金と励ましのメッセージをいただきました。

私たちの友情と信頼は、永遠のものです。どうもありがとうございました。（戸村 京子）

## 小さな座談会など 長野県伊那 (原 富男)

このところ伊那では、講演というよりも小さな集まりが続いています。先日は、伊那市長谷村で「暮らしの座談会」という座談会が開かれました。数年前、映画「六ヶ所村ラブソディ」上映会と一緒にやった、「海老原よしえ（歌手）」さんからの誘いがあり、出掛けました。

「暮らしの座談会」ということでしたので、「普段考えていることを喋れ」と言われており、何の準備もしなかったのですが、原発事故関係で質問があった時に困ると思い、講演用のパワーポイントの入ったパソコンを持って出かけました。

会場は、村の道の駅の中にあるイベントのできる集会所で、海老原さんの働きかけで、地元住民に加え、福島から南箕輪村や伊那市に移住した人、茨城からの参加者もありました。進行は、鎌仲ひとみ監督の「ミツバチの羽音と地球の回転」の製作に携わった富田貴史さんで、福島から移住した元「福島子供ネットワーク」の大井友継さんや、ホットスポットのある会津バング町から伊那に移住した女性の発言は、重みのあるもので、話し合いながら河田さん製作のパワーポイントを必要に応じて見てゆく形で、進行しました。特に「内部被曝」に関しては、皆さん関心があり、一方的に僕が喋るといふ形ではなく、お互いの事情をゆったり「聞き」ながら話が進み、非常に良い会でした。

富田氏は、福島の子ども達を長野県などに呼ぶ「保養キャンプ」をやりたいとのことで、僕もこれには賛同しました。以前からウクライナでは、子ども達のサナトリウムでの保養が行われていて、効果を挙げているので、これに学び進めたいと思います。また、一旦伊那に移住した人達も、本来求めていた「畑付き住宅などへの転居」の希望も出ました。座談会の数日後、何件かの空き家を紹介したり、僕の畑で採れた野菜などをプレゼントするなど、移住した人たちとのつき合いが始まりました。

今回の座談会は参加者は少なかったのですが、人数にこだわらずじっくり話すことも、時に必要だと思いました。

## 「田原でデモ 誰でもデモ」 (橋本 京子)

渥美郡田原町などの町村は、平成の大合併により渥美半島全体が田原市になりました。農業産出額日本一で、伊良湖岬などの観光地でもあります。そこに持ち上がったのが、「がれき問題」です。大村知事が、県内の知多市・碧南市



そして田原市を、広域処理場に選んだのです。まず立ちあがったのが、若いお母さんたちの「豊橋いのちと未来を守る会」。それが豊川・新城と広がっていった、田原で長く環境問題に取り組んできた「地域未来の会」の50~60代の人達と、20~30代の若い夫婦がいっしょになって、「がれき反対」のデモをしようということになりました。「田原でデモ」なんて前代未聞、どうなるか全く想像が付きません。8月10日（金）、豊橋からの応援部隊として、道の駅駐車場に着いたのが、集合30分前。

それらしき人が10人位。雨もパラパラしてきて不安でしたが、三々五々集まってきました。浴衣姿のお母さんと子どもたち（浴衣か水着？を着て集まろう）ということになっていた）、太鼓を持った人、パッチワークで作った横断幕。白い風船が皆に配られました。18時、代表の人（60代男性）の決意表明、知多市で反対運動をしている女性からのメッセージ、名古屋から応援に来た人もいました。18時半いよいよ出発。デモ申請がしてあったので、警察官が5、6人。本来は車道を歩くのですが、片側1車線で歩道の方が安全（それに人はほとんど歩いてない）という事で、歩道をいっぱい使って行進しました。なつかしい乳母車3台、ベビーカー2台。子どものペースに合わせるのでゆっくりです。途中、市役所前で「がれき受け入れ反対」「子どもの未来を守ろう」と叫び、大型スーパー前で解散となりました。新聞発表では70人でしたが、赤ちゃんももちろんカウントして100人以上いました。車やお店の中から手を振ってくれる人がすこし。まあ、成功といえるでしょう。2週間後、県は「がれき処理」を断念しましたが、毎月最後の金曜日に、デモは続けているそうです。



## 竹内さんのウクライナ便り

10月28日に行われる最高会議選挙に向け、ウクライナでは7月30日から選挙戦が行なわれていますが、日本と違ってポスターの掲示場所や枚数などに制限があるわけではなく、出所が必ずしも明確ではない多額の選挙資金がつき込まれて、TVでも各政党のコマーシャルが頻繁に流れています。9月初旬に行われた世論調査によれば、支持政党の第1位は与党の「地域党」(26.3%)、2位は実刑判決を受け収監中の前首相ティモシェンコ氏及び前内相ルツェンコ氏らが属する、野党のいくつかが統合して結成された「祖国党」(22.6%)、3位が国際的に著名なヘビー級ボクサーのクリチコ氏率いる「打撃党」(12.0%)、そして4位が「共産党」(10.8%)となっています。路傍に目立つ地域党の宣伝看板のスローガンの一つは、「安定を通じて繁栄へ」というものですが、現政権の作り出した、反対勢力を強引に押さえ込んだ上での「安定」をどれほどの人が望んでいるかが、この選挙の結果を左右するといえるでしょう。メディアに対する圧力もしばしば問題になっており、政府に対し批判的なあるTV局の銀行口座が、経済発展・貿易省により一時的に差し押さえられるという事件がありました。

今日9月28日には、「国際知る権利の日」にちなみ、都心の歩道で、昨年発効した「情報公開法[公共の情報の開示に関する法律]」を周知させることを目的とした写真展(賛同するジャーナリストたちのポートレートと彼らのメッセージを展示)が開かれているそうです。私はやたらに忙しくしている最中で、行けないのが残念ですが、ネットニュースサイトの「ウクライナの真実」で展示の内容を見ることができ、メッセージの一つは「僕たちの世代は、権力による情報の独占を撲滅しなければならない」というもの。ソ連時代の権力による情報の全面的な独占も、念頭に置かれているのですが、日本のメディア関係者はどれほどそのような危機感を持っているのでしょうか？

福島原発事故に関する情報は、ウクライナのメディアではほとんど流れなくなりました。し



<菜の花プロジェクト関係者との話し合い  
(2012.09)>

かし、チェルノブイリ事故の被災者たちは、福島のものに真剣な関心を持ち続けています。私が8月中旬から2週間ほど一時帰国した際、やや驚いたのは、日本の新聞等では今に至るまで福島関連の記事がかなり掲載されているということでした。といっても、それを見てわかったのは、採られるべき対策が実質上進んでいないらしいということでしたが。しかし、このままではいけない、という意識は、それなりの数の人々に共有されていると思います。東京で泊めてもらったあるお宅では、猛暑にもかかわらずクーラーを使うことをやめたという話で、年長の友人は、日本のこれからを熱く深夜まで語りたいと気合いが入っていましたが、私は翌日早くに空港に行かねばならず残念でした。

「救援・中部」が支援を続けているジトーミル州ナロジチ地区で、2年半前から内部被曝の健康に与える影響の調査を続けている木村真三さんの所属する獨協医科大学が、「救援・中部」のナタネプロジェクトのカウンターパートでもあるジトーミル農業生態学大学のティードゥフ准教授と学長を日本に招聘することになり、二本松市で講演が開かれるそうで、飯舘村でも視察が予定されています。私は彼らの通訳をするため、10月初旬の数日間また日本に行きま。福島県の土を踏むのは実は生まれて初めてで(数十年前、東京から鈍行列車で青森に行った時通過しただけ)、やや緊張しているのですが、出発の前日まで別件の通訳をキエフですることになっており、事前の準備をしているいとまがありません。(9月28日)

## 「チェルノブイリ視察ミッション」に参加して (遠藤 めぐみ)

ツアーに参加した一番の動機は、「福島支援・人と文化ネットワーク」の仕掛け人、講談師「神田香織」氏の講談“チェルノブイリの祈り”を、福島が事故が起こる前から何度も聞いていたことが大きい。

神田香織が前説で語る言葉に「講談師、見てきたように嘘を言い」というくだりがあるが、その“チェルノブイリの祈り”は、“嘘じゃないの”という程、危機迫り筆舌に尽くしがたい内容だ。その講談の原本が、チェルノブイリの真実を伝える“チェルノブイリの祈り”であった。作者のスベトラーナ・アレクシエーヴィチ氏の活動に触れ、その取材の進め方に心を打たれた。どんなところに住む人なんだろう。そんな気持ちに、福島が事故が後押しする形となった。

26年前の出来事が今どんな結果をもたらし、これからのふくしま支援に何が必要なのか。どんな佇まいで被災者と向き合えばいいのか。心の準備のできないまま現地に立ち、乗り込んだバスの車窓に、チェルノブイリの豊穡な自然が次々と目に映っていく。ここに住めなくなってしまった人たちの悔しさ、怒り、長い年月の日々の暮らしをどうやって切り盛りしてきたのだろう、コミュニティーの中の居場所があったのか、人間関係をどう紡いできたのだろう、子ども達の心はどんな軌跡を描いてきたのかと、思いは錯綜するばかりであった。

訪れた場所で最も印象に残っているのは、「おひさま幼稚園」での子ども達である。遊び方が子どもらしくない。お庭で走って遊ぶ姿がなく、子どもが大好きな追いかけっこが見られない。室内でもつい走ってしまうのが子ども。特に男の子など、注意されているそばから走り出す。そんな傾向が強い男の子が、ことさら元気がない。室内で遊ぶ男の子達の表情がとても虚ろだったのが、目に焼きついている。それに、泣き声が響いたり、笑い声が聞こえたりするのが、子どものいる場所であるはずだ。限られた時間だったので、一概に結論づけられないが、およそ幼稚園らしくない雰囲気であった。子どもの行動特徴は、国を超えても恐らくそれ程変わるものではないと思う。事故後 26 年経っても未だ、放射能の影響は様々な形で影を落としているのだ。出生時は健康でも、4、5 年経つと何らかの障害が発生し、現在は 100%健康障害があると、園長が話していた。原発事故が、子ども達の未来を奪う根源だということ、強く確信した時であった。

ブリピャチ市に住んでいた人達が、被災者が孤立しないようにと相互に助け合うための組織「ゼムリャキ」を結成した。それは、なんと事故の翌年である。彼らは、事故の翌日に着の身着のまま、詳しい説明も聞かされず、強制避難させられた。それきり、二度と家に戻ることはできなかった。

平穏な日常を一瞬にして奪われ、先の見えない不安でいっぱいだったはず。そんな大変な日々を送りながら、「ゼムリャキ」を組織する。その女性たちの、強い精神力と協働の精神には、心から脱帽した。しかし、ゼムリャキの方たちは淡々と語る。飄々とした表現の背景に、凄惨な苦勞が垣間見える。それ故、生の声がずっしりと重く響いた。この方々の話は、本当に辛く苦しかった。一番過酷な状況の時に、一体何ができるのだろう。百人が被災を受けたとしても、援助の仕方は百通り必要だ。特に心理的な部分は難しい。当事者の立場に立った支援、強引でない支援、多くを語らず隣に寄り添う、それが必要なのだと感じた。旅の行程で立ち寄った様々な場所は、想像を絶する悲惨な光景であった。住めなくなった村が 92 箇所。家はまるごと地面に埋められていた。また、事故処理後 2 週間で亡くなった 6 人の犠牲者、それ以降も次々に亡くなっている。

今でも、ガンや白血病で亡くなる人はあとを絶たない。これらはほんの一例に過ぎず、失ったものの大きさに言葉を失う。事故の起きた事実を丁寧に検証していくことは、今後にとって欠くことのできないことだ。しかし、そんな状況でも人は生きている。最も大切なことは、被災された人々がそれぞれ生活を営み、置かれた状況下で何を求めているのかを見極めることではないか。



<おひさま幼稚園(ナロジチ)で (2012 年 9 月)>

それを支援してきたのが、チェルノブイリ救援・中部だった。ゼムリヤキに限らず、ジトーミル州やナロジチ地区にとって、チェルノブイリ救援・中部はなくてはならない存在となっている。今回のような中身の濃いツアーが経験できたのも、チェルノブイリ救援・中部のこれまでの活動がなかったら実現できなかっただろう。コーディネーターの神野さんに、心から感謝したい。今後は、この貴重な経験を積極的に生かしていきたいと思う。



<ナロジチ庁舎前で  
(後列左が遠藤さん、前列右が米沢さん  
(2012年9月)>

## 「チェルノブイリ視察ミッション」に同行して (米沢 政美)

昨年3月の福島原発事故を受け、東京に住む私も、「故郷福島に何かできることがないか」と思い悩んでいた中、東京でふくしまを支援する団体「NPO 法人 ふくしま支援・人と文化ネットワーク」が立ち上がるという新聞記事を目にしました。そこでお会いしたのが、今回団長をお願いする事になった郡司理事です。「チェルノブイリへ行ってみよう！」氏のこの第一声で、企画はスタートしました。

その後、私がたまたま帰省していた福島県南相馬市で、汚染マップ作成などを手掛ける市民団体の設立総会に出席したことが縁で、「チェルノブイリ救援・中部」の神谷理事長と知り合い、実際にウクライナに何度も足を運んでいた神野さんをご紹介いただき、具体的な相談に乗っていただいたことで、この「チェルノブイリ視察ミッション（ピコツアー）」が実現しました。

出発前、私が考えていた事は、「未来の福島を考えるために、実際に原発事故から26年を経たウクライナを自分の目で見て、感じ、地元生活者のこれまでの状況と現状を知り、その成果を現在の福島に生かしたい」ということ、また、「どんな大変な国なのだろう」という、恐々としたものでした。

しかし、実際に私が見た「ウクライナ」は、とても自然が豊か、静かな環境、またそこに住む人々も実にゆったりしていて、笑顔が似合う、そんな落ち着いた雰囲気のある国でした。ただ、そこには、汚染地域に住みながら、自分たちの運命を現実として受け入れ、様々な障害・不満はあるけれども、それをマイナス志向ではなく、自分たちの活動にしっかりとつなげる生活をしている人々が住み、また、生まれながらに健康障害のある子ども達も多数いるという、厳しい現実もありました。

その中でも特に、自分たちのやるべきことを信念を持って続けていく、そんな尊敬すべき人々が、私の目の前で説明に立ってくれたことには、本当に感動しました。現在、消防博物館を守り、過去のこの惨事を風化させないよう、子ども達に教育を続ける「消防士達基金」代表のチュマクさん。基金立ち上げから、日本との窓口になり、様々な障害を乗り越えてきた「ホステージ基金」代表のキリチャンスキーさん。「チェルノブイリ人」と自分たちを呼び、誇りを持って前向きに生きる「ゼムリヤキ」代表のタマーラさんとその仲間の方々。環境の良くない中、診療を続ける「ナロジチ地区中央病院」の先生方。子ども達に良い環境をと、情熱を持って活動する「おひさま幼稚園」のクラブチェンコ園長と先生方など…。会う人すべてから、自分たちの使命を全うする「気構え」が感じられ、福島に今必要なものは、この「気構え」ではないのか？ そう思えた一週間でした。

「これから、長い長い戦いが福島そして日本で始まる」、そんな中で、今回のウクライナ訪問で得たものは大きかったと思います。帰国後は、この交流を更に広げ、大きく言えば、人類の犯した過ちを受け入れることになった同じ「運命人」として、しっかりと手を結び、次世代の子ども達の「幸せ」を、世界中の人々と実現していくことが重要だと、考えるようになりました。世界の大きな課題を抱えてしまったからには、これを解決していくための「勇氣」と「気構え」を持つこと、ここからが大きな出発点かもしれないと思えたこと、これが一番の成果でした。

最後に、チェルノブイリ事故から今日までの長い長い支援を通じて、現地の方々としっかりとした人間関係を築かれ、この度のミッション実現を全面的にサポートいただきました「チェルノブイリ救援・中部」様、そしてお世話になりました神野さんに、深く感謝するとともに、最大限の敬意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

## 事務局便り

事務所での長い蚊との「血闘」は、最後の「一刺し」に執念を燃やす蚊との、最終決戦を迎えている。「これが最後のごちそう!!」とばかりに、余裕で手に止まらせ、「そうはいくか!」と応戦している。長い夏の間に習得したテクニック??は、やっと実を結んだ。(ということは、それまで負け戦だったということ^:) 猛暑の昼下がり、しばし仕事の手を休め、河田さん栽培のペパーミントで作った清涼なペパーミントアイスティーで喉を潤せば、汗を書きながらの仕事もまんざらではない。エアコンもない、省エネを心配する必要もない! 事務所では、案外贅沢なひと時が味わえるものだ。

さて、先日、幼稚園と小学校低学年に通う子どもさんのお母さんが、放射線測定器を借りにみえた。人が測った結果を聞くだけでなく、実際に自分で測ってみたい…との事。その際の話。—学校給食で、頻りにきのこ類の料理が出されているので、心配で学校に問い合わせたところ、「そんな電話をしてくるのは、あなただけです。安全なものを使っていますから」と、「産地」も「安全の根拠」も教えてくれなかったという。学校給食は、地域の給食センターで一括して作られるのだから、学童の全ての健康に影響があるし、これからの長い学校生活の間、食べていかなければならないので本当に心配と、顔を曇らせておられた。また、小学校の中で、自分のような心配を抱えている方もみえるだろうけれど、話す人や機会がないと、残念がっておられた。事務所を訪れる同じような悩みを持つ若い母親達を、繋げていかなければと痛感した。新たに開催する「チェルノブイリ/フクシマ講座」を、より本質的な話のできる、また、人と人を繋げる場にできればよいと思う。(山盛)



## 研修生 自己紹介

はじめまして。「近藤 真理子 (こんどう まりこ)」と申します。

9月より、研修生としてお世話になっています。名古屋 NGO センター主催「Nたま」10期生として、NGO について勉強しながら、自宅近くの畑で、ゆるりと野菜作りをしています。土に触れ、自然を感じ、その恵みに感謝する日々を送っています。これから半年間、主にクリスマスカードキャンペーンを担当していきます。今年も、チェルノブイリと福島子ども達へ、クリスマスカードを届けます!

カードを通して、子ども達に笑顔が広がることを願っています。この場を通して、皆様とつながり、良い報告ができるよう取り組んでいきます。半年間、よろしくお願ひします。

## 編集後記

☆1年半の復旧工事を経て、原町火力発電所がいよいよ再開するらしい。津波で被害に遭った南相馬の海岸に、頼もしげにたたずむ発電所。こうして東北のインフラが整っていくことが復興の足掛かりとなりますように。(佳)

☆キエフ出国便が4時間遅れて、乗継ぎの成田行きは既に出発した後。入国ヴィザがない私は、不法入国者。監視カメラと監視員付きの軟禁状態。食事もお風呂もあったけど、ロビーへは立入り禁止! 外出禁止! 初めてのモスクワだったので…ラウンジでお茶も楽しめなかったよ~。(美)

☆領土問題で、隣国を挑発する人間がいる。暴徒を金で雇い、抗議デモを偽装する人間がいる。偏向報道で、世論をあおる人間がいる。しかし、隣人の多くは、「理性愛国」「反対暴力」というプラカードを掲げ、冷静に平和を求める行進をしていたという。私たちの本当の友人は誰?(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473